

戦後 70 年、日本のキリスト教大学はどこへ行く

梅 津 順 一

一、はじめに

本日は建学 60 周年記念講演にお招きいただき、ありがとうございます。昨年は、同志社大学学長の村田晃嗣先生が「同志社から ICU へ、リベラル・アーツの旅路」として講演されたと伺っております。昨年は、湯浅八郎先生についての展示があり、同志社大学学長から ICU 学長への道を歩まれた湯浅先生にふさわしい企画ではなかったかと存じます。今回の展示の対象は、ディッフェンドルファー氏とトロイヤー先生ですが、ディッフェンドルファー氏は長くメソジスト監督教会の仕事をなさった方ですので、メソジスト監督教会が建てた青山学院の私が招かれたのかも知れません。そうであれば、「青山学院から ICU へ、キリスト教大学の行くへ」といった論題でもよかったのですが、青山学院と ICU だけではなく、つとめて日本のキリスト教大学の将来を考えたいと思い、このような題名にいたしました。

ただ、私はトロイヤー先生とも縁がありまして、私は ICU の 14 期生ですが、14 期生はおそらくトロイヤー先生の価値研究のクラスを受講した最後の学年であったと考えるからです。私が在学した 1970 年に向けての時期は、いわゆる学園紛争の時代でありまして、戦後 25 年を迎える転換期でありました。ICU にとっても転換期で、トロイヤー先生など草創期を担った先生方が引退し、アメリカに帰国された時期でもあります。ですから私の世代は、草創期の雰囲気について当事者の語ることを直接聞きくことができた世代で、また草創期の方からいえば、草創期の理想から平気で逸脱する言動をとる困った世代でもありました。

最初から脱線気味で恐縮ですが、横須賀社会館の館長を長く勤められ、戦後日本の社会福祉の分野で重要な役割を果たした阿部志郎先生をご存知の方もおられると思います。阿部志郎先生は戦前に青山学院院長であった阿部義宗先生のご子息で、中学までは青山キャンパスで育ち、青山学院、明治学院、東京商科大学、今の一橋大学を経て、ニューヨークのユニオン神学校で学ばれました。その阿部先生から、御自身と ICU との面白いいかかわりをお聞きしたことがあります。阿部先生がニューヨークに留学中に、当時のテレビ番組に、グルー元駐日大使の相手役としてテレビに出演したことです。グルー元大使が日本で新しくキリスト教大学を建てる計画とその意義を語り、日本人学生として阿部先生が打ち合わせ通り賛意を

示すものだったそうです。その阿部先生は ICU の設立に実行面で大きな貢献をされた方として、アメリカではそのグルー大使、日本では一万田尚登日銀総裁、それに教会関係者ではディッフェンドルファー氏を挙げておられました。

二、青山学院からみた ICU

昨年（2014 年）、青山学院は創立 140 周年を祝いました。ICU が 1952 年、戦後 8 年に創立されたとすれば、青山学院は明治 7 年に創立されました。といいましても、青山学院という学校が始まったのではなく、青山学院に流れ込む最古の源流がその年に設立されたことを意味しています。それはドーラ・スクーンメーカーという当年 23 歳、アメリカ・イリノイ州から太平洋を越えてやってきた女性宣教師がはじめた女子小学校です。女子小学校といっても集まった女子児童はたったの 5 名、それに大人 1 人と男の子が加わって 7 名で始められた学校でした。いや、学校という名に値しない、若い女性宣教師の周りにできた学習のグループで、塾のようなものでした。しかし、そこから始まって 5 年後には、築地の外国人居留区に海岸女学校となり、その 10 年後、明治 22 年には、現在の青山キャンパスに移転して、東京英和女学校となっています。ちなみに、御承知の方も多いと存じますが、英和というのは、Tokyo Anglo-Japanese Seminary という英語の名称から来ています。この英和女学校は、女子の教員養成を視野に入れておりました。

青山学院の男子教育の源流は、二つありまして、一つは、ジュリアス・ソーパー宣教師のもとで設立された耕教学舎、もう一つは、ロバート・マクレイ宣教師が横浜山手に建てた美會神学校です。さきほども触れましたが、青山学院はアメリカのメソジスト監督教会の伝道の中で設立された学校でありました。当時のプロテスタント伝道は、メソジストに限らず、福音伝道に加えて積極的に教育に取り組み、教会とともに学校を建てました。学校設立の目的として一番重要なのは、伝道者養成を課題とする美會神学校 The Methodist Mission Seminary ですが、ソーパー宣教師の耕教学舎は、彼が洗礼を受けた日本人と協力して創設した学校でした。最初は英語中心の教育でしたが、次第に、東京大学をはじめ、上級学校への入学準備のための学校となっていきます。

この二つの男子系の学校が合同して東京英和学校となり、現在の青山の地に立地を定めて再出発し、名称を青山学院と改称することになります。渋谷はその名の通り谷ですが、その渋谷から坂を上ったところが青山、この辺りは大名の屋敷地があり、青山の地名は現在の青山墓地に屋敷のあった美濃郡上藩主の青山氏に由来するといわれています。青山キャンパスは伊予西条の藩主松平氏の屋敷でありました。東大本郷キャンパスが加賀藩の屋敷地、慶應義塾の三田キャンパスが島原藩の屋敷地であったことはよく知られていますが、青山学院も大名屋敷跡でありました。その連想でいいますと、ICU も軍需工場の跡地でありますから、明治の出発点も、戦後の出発点も、大学キャンパスは日本社会の非軍事化と関係があることになります。

青山キャンパスはおおよそ三万坪ですが、当時の値段は 6,000 円で、ボルティモア在住のガウチャー牧師の献金によって賄われました。ガウチャー牧師は青山学院だけではなくアメリカ内外のキリスト教学校の発展に多額の献金をなされたかたです。一牧師がどうしてそれだけの資金をお持ちか疑問でしたが、牧師夫人が多額の遺産を受け取られた方だそうです。それはともかく、いま申しましたように、男子系の二つの学校が合同して青山学院となり、関東大震災の後に、東京英和女学校を引き継いだ青山女学院を合わせて、現在の青山学院の原型が出来上がりました。ICU の歴史と比べれば、ICU の設立母体がエキュメニカル、超教派であるのに対して、青山学院はメソジスト監督教会が母体であり、ICU が最初から大学として出発したのに対して、青山学院の場合は、宣教師の周りにできた小さな学校が少しずつ規模を大きくし、合同して出来上がったのです。もう一点、ICU は当初から牧師養成の神学部を持たない大学であることも重要な違いです。

戦前の青山学院にとって大学昇格は悲願でしたが、実現しておりません。戦前の日本では大学へのハードルは高く、キリスト教系の私立大学では、大正期に同志社と立教が大学となり、昭和に入って上智と関西学院が大学となっただけです。戦前の青山学院の理事会記録は英文で残されていますが、青山学院の中の学校は、Academy, College, Seminary, と区分されていて、それぞれ中学・高校レベル、高等学部、神学部に対応します。すなわち、カレッジというべき高等教育は行われていたが、日本の大学制度における大学とはみなされていませんでした。青山学院が大学に昇格できなかった一つの理由に、関東大震災の被災がありました。青山学院は当時、主要な校舎を失ってしまったのです。

キリスト教の宣教地日本に、キリスト教系大学の設立を求める声は、海外にもありました。すでに、1910 年にエディンバラで開かれた世界宣教会議において、キリスト教大学の設立が話題となり、とくにキリスト教学校が比較的受け入れられた日本に、帝国大学に肩を並べるキリスト教系大学の設立は、大変意義があるプロジェクトと考えられました。その場合は、特定の教派を超えた合同キリスト教大学として構想されていました。実際、女子教育の面では、1918 年に東京女子大学として実現しました。青山学院をふくめて、当時のキリスト教系女子学校の最上級の部分が合同して、東京女子大が設立されたのです。その意味で、東京女子大学はエキュメニカルな背景を持ち、文理学部、すなわちリベラル・アーツ・カレッジという意味でも、戦後の ICU と似ています。ただし、東京女子大も戦前は、日本女子大、津田塾大学と同じく、正式の大学ではありませんでした。なお、戦前に、男子系の合同キリスト教大学が実現しなかったのは、明治学院と青山学院の間に折り合いがつかなかった事情もあったようです。

三、戦後改革と ICU

改めて言うまでもなく、戦後日本において、国際基督教大学の設立は大きな思想史的事件でありました。開国とともに宣教師が日本に上陸、明治維新前後より、宣教師は教会と学校

を建てたのですが、明治初期のキリスト教学校は日本社会にとってはいわばよそ者でありました。求道の心から、あるいは英語の知識を求めてキリスト教学校に通うものはいても、社会全体からみれば少数派、国家から見てもキリスト教学校はその教育政策には入り切れない、取扱注意の存在でした。それが戦後のキリスト教大学の設立には、日本の国家的指導層も国民も大きな支持を与えました。アジア太平洋戦争における日本の敗北は、明治以降の日本国家体制の挫折であり、天皇崇拜を中核に置く臣民教育の挫折と捉えられたからです。

国際・キリスト教・大学、この大学名自体が、戦前日本へのアンティ・テーゼでした。日中戦争を終結することができなかった日本は、国際社会において自らの安定した地位を確保するための冷静な判断を失っていました。戦線拡大は満州の荒野で斃れた「英霊の声」に促されたものであるとすれば、和平への道は精神的呪縛から解き放たれなければなりません。さらに、戦時体制の中で、科学技術者、大学の知識人もまた批判精神を失っていたのです。したがって、戦後日本の中で国際基督教大学の設立は、その大学名だけで存在価値を示すものでした。その国際基督教大学の存在意義は、多かれ少なかれ、戦前より存続していた日本のキリスト教大学の存在意義と共通するものでありました。

今から 30 年前、1985 年の ICU キリスト教週間で、神学者大木英夫は「永遠の相の下に——ICU と日本」という講演を行っています。大木教授は東京陸軍幼年学校在学中に日本の敗戦を迎え、その年の秋に賀川豊彦の伝道集会でキリスト教に触れ、のちに東京神学大学で長く教鞭をとりました。いわば敗戦による日本の回心を、彼自身が少年の身で体現された方ですが、大木教授は ICU の存在意義を日本との対峙に見ています。敗戦によって無残な姿をとどめた日本、その問題点を冷静に見つめること、再生の方向を探ること、それは宗教的次元を必要とするし、鋭利な知的作業が求められる。それは戦後改革期だけの問題ではなく、「永遠の相」の下で、日本国の来し方、行く末、人類社会の来し方、行く末を見つめる視点でなければならない。大木教授の講演は、ICU のミッションを大きなスケールで語るものでした。

先に申しましたように、私は 14 期生ですから、草創期の雰囲気是直接知るものではありません。むしろ、世代的には草創期の理想を無視する、ないし敬意を持たない困った学生が現れたといわれた世代です。時代的な背景からいえば、戦後日本の民主化が課題とされた時代から、東西対立、いわば冷戦構造のなかで日本の立ち位置が問題とされ、民主的な志向と親アメリカ的志向との間に緊張関係が生じていくことになります。学生一般には、当時の言い方では革新勢力と連携する志向が優勢で、それが他方から見れば、社会主義ないし共産主義を支持する動きともとれることになります。それと高度経済成長にともなう社会のひずみが自覚され、高度成長は豊かな社会の実現ではあるが、巨大なマシンのように社会のあらゆる現象をねじ伏せていくと捉えられた時代でもありました。

私自身の個人的な経験を少しお話しますと、私は山形県の出身で旧制中学の伝統を引く高校を卒業して、ICU に入学しました。私の高校は、成績の最上位は東京の国立を狙い、

上位層は東北大学を目指すということで、ICU の位置づけは不明という状態でした。私が ICU を志望した背景には、家庭がキリスト教のこともあります。高校時代の東京オリンピックが大きいように思います。国際化の時代という実感があり、国立は東北大学の法学部を受験して合格もしていたのですが、あまり迷うこともなく東京に出てきました。もう少し詳しく言いますと、当時日本育英会の特別奨学生資格を得たものには、ICU は授業料が半額であったのです。半額で年間 3 万円。国立は確か、12,000 円。ただし、ICU の寮に入ると確かひと月 3,000 円ですから、経済的にも見合うものがありました。

そこで上京しての印象ですが、入学当初びっくりしたことがいろいろありました。当時は、フレッシュマン・オリエンテーションがかなり丁寧に行われていて、Faculty Home Visiting というプログラムがあって、それも何軒かの教員宅にお邪魔したことがあります。フレッシュマンに、やはり当時 IBS、ICU Brothers, Sisters と呼ばれていた上級生の世話係と一緒に十数人での訪問だったのですが、私たちのグループはたまたま鵜飼信成学長宅にお邪魔しました。行ってみますと、鵜飼学長の横に、この春卒業した女性がおりました。関係ない人もいと最初は思ったのですが、その方はどうも鵜飼先生の卒論指導を受けた学生であるらしい。彼女がいうには、鵜飼先生は東京大学の社会科学研究所にいらしたころは、社会的な発言も積極的なさって、シャープな批判的な論客で知られていた。ところが、ICU の学長になられてからは、どうもシャープさが失われている。自分の先生を目の前にして、随分遠慮のない発言だと心底びっくりいたしました。

ICU の設備の中では、私は図書館が素晴らしいと思いました。図書館用の家具が素晴らしい。びっくりするほど座り心地がよい、とくに二階のラウンジのソファがよくて、当時すでにそこには冷水を飲める設備がありました。もちろん、レファレンス・ルームは充実しているし、蔵書はすべて開架式、開館時間も夜の九時までは利用できたと記憶しています。私は遊びに行くお金もないので週末はよく図書館に行って、新聞を読んだり、雑誌を見たりしていましたが、今振り返って、大変充実した時間であったと思います。当時の図書館長は高橋たね先生、御存知の方もおられるでしょうが、戦後日本で皇太子、現天皇の家庭教師をされたヴァイニング夫人の秘書をなさった方です。高橋先生にはこんな思い出もあります。たぶん入学して、D 館の入り口近くにあった郵便ポストの辺りで友達と立っていたら、白い車がスーと止まって（当時は車も通れた）、窓が開き、見ず知らずの学生である私に対して、「これちょっと入れてくれない？」と封筒を差し出すのです。最初は何のことが分からなかったのですが、どうもポストに入れてほしいという依頼であることに気が付きました。これが戦後民主主義とどう関係するかは論理的に語ることはできませんが、新鮮な文化のキャンパスでありました。

当時のキャンパスでは、大学の業務に積極的に学生アルバイトが用いられていました。私自身が経験のあることでは、図書館のシェルフイング、返却された図書の配架、本館の清掃、そういえば夜 ICU の代表電話にかかってくる電話の交換手も学生がやっていました。

ただし、学生ストライキというか、ラジカルな学生が本館に立てこもったとき、清掃のアルバイトをやっていた学生が、鍵のありかを知っていたとかいう問題になって、その種の学生アルバイトも縮小していったように思います。寮生活について一言触れておきますと、当時はどこの大学も自治寮といって学生自らの自治的な運営が理想とされ、また大学から見ればその党派性が問題とされていました。私がここで特に申し上げたいのは、その寮会が議事法を意識して運営されていたことです。会議には議事法が必要です。議案提出権とか、採決の方法とか、議事のルールに則ることがとりもおさず民主的な手続きを意味しますが、日本社会ではいまだに、そのことが意識されていないのではないのでしょうか。ただし、この寮会の議事法も、紛争の過程で霧消してしまいました。

四、戦後のキリスト教大学とリベラル・アーツ

戦後のICUの発足が、旧体制日本へのアンティ・テーゼであり、ひとつの思想史的事件であったことはすでに述べました。大学の形としては、当初は旧制の帝国大学に引けをとらないキリスト教系総合大学を設立する夢がありましたが、結果としては、小規模のリベラル・アーツ・カレッジの設立となりました。リベラル・アーツ・カレッジという言葉は今日でこそ市民権を得ていますが、私の在学中はそれほど知られていませんでした。しかし、結果として、ICUの日本社会における存在価値は、リベラル・アーツ・カレッジとしての大学の在り方を示し、社会的評価を受けた点にあります。リベラル・アーツ・カレッジは、人間教育、教養教育を基礎に専門分野を学ばせる点において、従来の日本の大学と対極的な性質をもつものでした。

日本の大学第一号は、いうまでもなく東京大学ですが、その東京大学の源流の多くは、省庁が実務家を養成するために設立した学校でした。司法省の司法学校、工部省の工部大学校、農商務省の駒場農学校などが、徐々に東京帝国大学として統合されました。ちなみに、内村鑑三らが学んだ札幌農学校も、北海道開拓使、現在の北海道庁管轄の学校でした。これらの学校では、お雇い外国人がその国の言葉で教えていましたから、グローバルな基準の学校でもありました。ただし、ここで目指されたのは、政治制度をはじめ社会的諸制度の洋風化に伴い、その意味と運用を外国語で理解でき、実務的な判断のできる人材の養成でした。ここに高級実務家の促成栽培という日本の高等教育の特徴が見て取れます。札幌農学校のクラーク先生のように、聖書を用いて人間の内面から鍛えようという教師は例外的でありました。

ですから初期の帝国大学は外国語での教育で、帝国大学に入学するにはその授業についていくことができねばならず、内村鑑三が教えた東京大学への予備門、第一高等中学では、英語教育が重視されていました。内村鑑三はアメリカ留学帰りであり、生きた英語を教えられる教師として採用されたわけです。内村の英語教育は型やぶりのもので、伊藤博文の憲法義解の英訳？をテキストに使うなど、学生にとっても人気がありました。内村はまた、地理学、

歴史学も教えていますが、その内容はおそらく後に「地理学考」「興国史談」にまとめられたと考えられます。とすれば、内村鑑三は第一高等中学において、孤軍奮闘、アマスト・カレッジ仕込みのリベラル・アーツを教えたということもできます。当時、学内で内村鑑三に反感をもっていたグループとして、国家主義的學生、東洋倫理派、それに派手な内村のパフォーマンスに苦虫を噛み潰していた英語教師がいたことが知られますが、そうしますと内村鑑三不敬事件の学内的背景として、リベラル・アーツへの反発があったと解することもできます。

戦後、ICU が日本の大学教育に一石を投じたとすれば、旧来の日本のキリスト教大学はその後どのように展開したのでしょうか。戦前の大学制度において、青山学院が大学昇格はならなかったことはお話ししましたが、戦後には、ほぼそのままの陣容で新制大学として出発することができました。文学部および商学部二学部構成で、それぞれ一学年 400 名程度、完成年次では二部すなわち夜間部の学生を入れて、大学全体として 4,000 名近い規模でありました。開学にあたって豊田實学長が述べた教育目的は、大学レベルの専門的教育を行う上で、キリスト教に基づき、平和思想、社会人類に対する奉仕的人生観を養うこと、さらに専門如何を問わずに、英語教育に力を入れ、世界市民としての自信をもつことを挙げています。ここには広い意味でリベラル・アーツの教育理念が語られています。

その後の青山学院の歴史は、学部学科の増設によって総合大学としての陣容を整える過程でありました。商学部は比較的短時間の内に経済学部へ編成替えされ、1960 年代の半ばより、第一次ベビーブーム世代の大学進学に合わせて、法学部、経営学部、理工学部が設置されました。また、この時期文学部には、従来の英文学科、教育学科、キリスト教学科に加えて、フランス文学科、日本文学科、史学科が増設されました。この時期が大学拡大の一画期ですが、次の画期は 1980 年代に訪れます。この時期は大学進学率の上昇と第二次ベビーブームによる大学進学者を見据えた拡充ですが、青山学院にはこの時期、国際政治経済学部が設立されました。この時期はまた、国家の都市機能の郊外への分散政策に対応して、都心からの大学の一部移転が行われ、多くの都心の私立大学と同じく、青山学院の場合も厚木に新しいキャンパスを求めています。

第三の転機は、大学進学率の上昇と大学設置基準の規制緩和、経済構造のサービス化、グローバル化を背景とするものです。この十数年あまり、国立大学ではいわゆる教養部が廃止され、伝統的な学部とは異なった、総合的というか文理融合というか、いわゆる言い難い学部が出現しました。私立大学でも同じような傾向があらわれ、青山学院大学の場合には、総合文化政策学部、社会情報学部、最近では地球社会共生学部が設立されました。また、この十年ほど、法科、会計、ビジネスなど高度専門職のための専門職大学院が設立されるようになり、青山学院大学も三つの専門職大学院を持っています。このようにして戦後青山学院大学は、リベラル・アーツ教育の重視を掲げつつ、いわゆる総合大学として発展してきましたが、大学院レベルの比重が少なく、アメリカ型のリサーチ大学への道を歩んでいるとはい

えない状況にあります。

日本の大学では、アメリカ式のリベラル・アーツ・カレッジから専門職大学院へという専門職教育の路線が定着していません。昨今の法科大学院をめぐる問題は、むしろ逆戻りの気配すらあります。専門職はできるだけ早く、余分な勉強をしないで試験に合格できれば良い、促成栽培でよいとの風潮があります。では、同じ時期 ICU はどのような道を歩んだのか。私はこの問題に踏み込むには知識が不足していますので、ごく一般的な事柄を記すとすれば、ICU の歴史は、青山学院とも共通して、第一に学科構成の拡充であり、それとも関係して学生数の増加です。開学当初は、人文科学科、社会科学科、自然科学科の三学科、学生数一学年 200 名弱で出発したのが、60 年ごろまでに語学科、教育学科が加わり、70 年頃より、学生数が 300 名台を超えて、91 年には国際関係学科を増設、学生数も 95 年には 500 名を超えています。これに 9 月生、留学生を加えると、リベラル・アーツ・カレッジとしては大きな規模となります。

私の在学中も聞かれたのですが、教養学部とはいってもミニ総合大学ではないかとの批判を受ける可能性があります。そのためもあったのでしょうか、2008 年より教養学部、アーツ・アンド・サイエンス学科として、いわゆるメジャー制度に移行しています。これはカリキュラム面で、リベラル・アーツ・カレッジであることを論理的に徹底したものと受け取れます。青山学院大学は日本で大規模な総合大学といわれても、アメリカ流のリサーチ大学に発展することはなかなかできない、ICU も時代の要請、社会のニーズにこたえる形で拡大すれば、リベラル・アーツ・カレッジの形が壊れかねない問題を抱えているのかも知れません。では、ICU の卒業生の進路はどうか、大学院教育とのかかわりはどうか、日本の他の大学とどう違うかが興味深いところです。

五、キリスト教からの解放？

さて、今日の日本でも大学教育におけるリベラル・アーツの重要性は広く受け入れられるようになりました。専門教育以前に、社会人としての基本的教養を身に付けること、グローバル時代にふさわしくコミュニケーションの手段として英語を駆使できること、さらには平和教育、差別や社会的少数者、社会的弱者への偏見と抑圧の除去といった、ひろく人権思想の普及などは、社会常識としてどの大学でも重視されるようになりました。ただし、その場合、キリスト教系大学以外では、リベラル・アーツと宗教の関係、とくにキリスト教の役割については、ほとんど言及されることはありません。日本の教育史の社会的文脈では、リベラル・アーツは英米の宣教団体が設立したキリスト教系の大学で強調されてきました。しかし、今日日本のキリスト教系の大学において、教師のキリスト教信者の比率は非常に少なくなっています。キリスト教大学においてすら、大学の基礎的教養と宗教との関係を問うことすら難しくなっています。

リベラル・アーツ教育にどうしてキリスト教、とくにプロテスタンティズムが必要かとい

う疑問には、ひとまず歴史的に答えることができます。すなわち、日本を含めて伝道地に設立された大学は、アメリカの大学、とくに建国期のニューイングランドに設立されたカレッジを原型としています。それらのカレッジは宗教者が建てた大学であり、牧師養成をその重要な一課題としていたのです。植民地期のカレッジといっても設立時は、教員は学長と2、3名、学生数は全部で100人に届かない、塾ともいえるべきものでしたが、彼らは植民地社会の次世代のリーダーを育てる必要がありました。そのリーダーの重要部分が聖職者であり、加えて法律家、医者、建築家といったいわゆる知的専門職の養成に取り組みました。グラマール・スクールで古典語、すなわちラテン語、ギリシア語をある程度マスターした生徒を大学で教育したわけで、入学者の年齢は15、6歳で、20歳にもなれば卒業で、そのあとはいわば個人的な訓練で、知識を身に着けて特定の専門職に就くことになりました。

ですから、当時のリベラル・アーツ・カレッジは、教師はすべて神学者・牧師であり、見方によれば神学校のようなもありました。学生はすべて寮生活ですから、修道院とまではいなくも、日常生活は宗教的な規律の下にありました。18世紀の啓蒙主義の時代になっても、聖職者でもある学長が卒業生に道德哲学を講義して、クリスチャン・ジェントルマン教育の仕上げをするのが慣例でした。スコットランド啓蒙の薫陶を受けたプリンストンの学長ウィザースプーンもそのような道德哲学の講義を残していますし、バプティスト派が建てたブラウン大学の名学長フランシス・ウェイランド（彼も聖職者です）が残したモラル・サイエンスと経済学の教科書は、長い間アメリカの大学の標準的な教科書として使用されました。この本は明治期の青山学院でも用いられたらしく図書館に入っていますが、日本ではとくに福沢諭吉に影響を与えた書物として知られています。

アメリカの大学の歴史でいいますと、こうした宗教的志向の強いカレッジは、一面では啓蒙思想の影響で次第に主知主義化し、宗教的な情熱を失っていく面と、他方で、宗教的な覚醒運動とともに、宗教的原点を重視する新しい大学が設立される面がありました。たとえば、新島襄、内村鑑三の留学先として有名なマサチューセッツ州のアマスト・カレッジは、主知主義化したハーヴァードに対する批判を意識して設立された経緯があります。宗教的覚醒を経験したカレッジでは、寮生活における朝晩の礼拝など、宗教的プログラムが充実していただけて、神学のサークルなど宗教的活動も活発なものでありました。間歇的におきるリヴァイヴァルでは、いたずら好きの悪童たちが、大挙して回心し、そのあるものは伝道者となり、海外伝道を志すものもありました。西部開拓地に建てられて大学も含めて、伝道地の大学、海外伝道の中で建てられた大学は、カレッジの宗教的原点を重視するものでした。

このようなクリスチャン・カレッジも19世紀後半より、大きな課題に直面することになります。アメリカ社会の工業化に伴う社会変化が与えた影響もありますが、より深刻な問題としてキリスト教的世界観を揺るがすラディカルな知的傾向が広まっていったことです。その第一は、聖書の高等批評の出現で、聖書のテキストが神聖な神の言葉という以前に歴史的

な一文書として取り扱われることになったことです。もう一つは、聖書の天地創造の記述に真っ向から挑戦するチャールズ・ダーウィンの進化論の登場でした。こうした新しい知的傾向が主流になるにつれて、大学ではキリスト教信仰もさまざまな思想信条の一つとされるようになってきました。必修科目であった聖書の時間は、宗教学ないし価値観を学ぶ時間となり、大学で礼拝や宗教活動を大切にする習慣も薄れていくことになります。教員の採用の方針としても、明確なキリスト者を求めることも少なくなり、自己の専門科目をキリスト教信仰と関連させて語る教授も少なくなっていました。

このようにアメリカ大学史の文脈で言えば、こうしたいわば世俗化はすでに 19 世紀末以来進行していたことになります。これに対して、いわゆるファンダメンタリズムの立場に立つ大学もあったわけですが、戦後日本にキリスト教大学の設立を推進した人々は、ファンダメンタリストではなく、リベラルなプロテスタントでした。そもそも、トロイヤー先生の日本人の価値観の研究自体が、宗教的な相違をひとまずはカッコにいられて、価値観を検討するという方法ですから、宣教師が土着の文化を上から目線で断罪するという態度とは正反対でありました。さらにいえば、大学紛争を経験したトロイヤー先生は、学生の問題提起に誠実に付き合ったうえで、ICU への告別講演で、大学における「信頼」の重要性を示唆していますが、その信頼は真理への謙遜として根拠づけられています。すなわち、宗教的な言葉ではなく、特定の宗教、ないしは教派を超えた、普遍的価値を基準に語っておられます。

とすれば、戦後日本の再出発にあたってのキリスト教への熱意は何だったのかということになります。アメリカ型民主主義とそれを支えているキリスト教に対する日本側の熱意の方がヴォルテージは高かったのか？トロイヤー先生の言動に接するかぎり、また物理学のワース先生とか経済学のグリーン先生など、私自身多少は知っているいわゆる **Teaching missionary** の先生方の態度も、キリスト教の押しつけなどとはまったく違って、冷静で温和なものでした。とはいっても、そうした先生方の信仰があいまいであったということではなく、静かな情熱をもって教え、語られていたように思います。その意味で、私の世代は戦後のキリスト教大学のよき時代、敬虔と学問が調和していた最後の時代であり、その後、ヴェトナム戦争後のアメリカ的価値観の揺らぎ、高度成長にともなう世俗化、巨大メカニズムへと化した社会への人間回復の叫び、グローバル化と宗教的多元主義の同時進行などによって、本家本元のキリスト教自体が捉えがたいものになっていきました。

リベラル・アーツには、キリスト教は必要か、必要であるとすればどのように位置づけることができるのか。この問いは ICU の課題であるとともに、日本のキリスト教大学全体の問いであり、そこにキリスト教大学の存在意義がかかる重要な問いでもあります。戦後の日本においては、リベラル・アーツとプロテスタンティズムの関係は自明のものでした。しかし、リベラル・アーツの本家本元のアメリカでは、リベラル・アーツは特定の宗教、特定の教派に関係づけるのではなく、多宗教共生の時代、多文化社会の中で、宗教の違いにもかかわらず成立する、普遍的な学識、市民意識を支えるものとして想定されています。では、そ

の近年の常識を日本社会で応用すれば、これだけキリスト教がマイノリティの社会で、取り立ててキリスト教に固執する理由はないのではないか。むしろ、キリスト教もよい、ほかの宗教もよい、どの宗教も、リベラル・アーツとよい関係を持ちましょう。そう考えれば、なぜ特別にキリスト教が必要かには答えられなくなります。

六、むすび

「キリスト教大学はどこへ行く」というテーマを掲げて、羊頭狗肉、主題にたどりつけないで時間が無くなってきました。キリスト教大学と申しますのは、今日風にいえば教育 NPO でありまして、それが必要だという人々が集まり、資金を集めて経営体を組織し、土地建物を確保し教員を迎え、学生を募集して始められたものです。キリスト教大学というのは端的に言えば、キリスト教会が、教会の信徒の献金で始めた学校です。私立大学の寄付者という和多額寄付者の名前が浮かびますが、草創期はそうではありません。それ以後でも、多くの名の知れぬ人々の支えで設立されました。戦後すぐの ICU のために、アメリカのキリスト教大学で、学生や教師が食事を一食抜いて、そのお金を送るということが行われたのであります。

時代は移り、大学にお金がかかるようになって、教会だけで支えることができなくなり、大学の卒業生を中心とするビジネスマンの寄付金が重要になっていきます。これが財政的にみたキリスト教大学の世俗化で、近年はさらに巨大科学などにお金がかかりますから、国家の補助金が大きな比重を占めるようになってきています。国家の補助金ももとはといえば国民の税金ですから、いただけない理由はありませんが、見える紐はついていなくとも、国家の教育政策が、よかれあしかれ、大学の方針、運営に影響しないはずはありません。とすれば、日本のキリスト教大学はどこへ行くは、信仰的にも財政的にも、支えとなるはずの日本のキリスト教会はどこへ行くと切り離せない問いとなります。

日本のキリスト教はどこへ行く。このテーマは ICU の顔でもあった古屋安雄名誉教授が倦まず弛まず書き続けた問題ですが、それが教会問題でありつつ、他面でキリスト教学校の問題であることは、あまり意識されていないかも知れません。しかも、このテーマは論じる人のミッションの意識にかかわらせて議論しなければ意味のないテーマであります。日本のキリスト教大学のミッションは何か、キリスト教会のミッションは何か、いまこの時点で、この場所で、何を語りうるか、それが問題です。これを ICU 創立時の状況と比べてどのようなことが言えるでしょうか。敗戦直後、国際的に開かれた態度・キリスト教・大学における批判的知性、これらを一体として理解することに何の疑問もありませんでした。キリスト教関係者からは、日本をキリスト教国にという勇ましい発言もありました。それに対して、民俗学者の柳田国男氏は、「やれるものならやってごらんなさい。」とクールに言い放ったそうです。

「やれるものならやってごらんなさい。」「とてもやれるはずはないでしょう。」まさしく、

日本の教会の現状はとても楽観的に語りうるものではありません。かといって、柳田国男氏が理想とする常民の常識が通用する社会、御先祖さまを大切に作る古き良き日本が健全に生き続けているかといえば、そうでもありません。敗戦時に鈴木大拙が語った「日本の霊性」も、農村社会の変貌とともに危機に瀕しているのではないか。最近話題となった限界集落における「寺院消滅」、地方都市のシャッター街は、地域社会の空洞化、日本社会の精神的空洞化をも示唆しています。皮肉なことに、その精神的危機はしばしばグローバリゼーション、アメリカナイゼーションの帰結として語られています。それは日本社会が、民主主義であれ市場経済であれ、近代社会の諸原則の道徳的基礎、宗教的基礎を真剣に考えたことがなかったことを意味します。その問題は直ちに、リベラル・アーツにおける宗教の問題に行きつきます。

最近ある有力な政治家は、日本を「世界の中心で輝く国」にしたいと語っています。オリンピックの全種目で金メダルを取ることができるような国にしたいのでしょうか。微笑ましい目標ですが、金メダルを取りたいために一心不乱では、友人が得られないのではないか。輝く国は「金甌無欠」という言葉をも連想させます。「金甌無欠」、現代では聞いたことがない人も多いでしょうが、それは傷一つない黄金の瓶を意味し、他国から侵略されたことのない国を意味します。日本は「金甌無欠」であるから、決して敗戦することはない。つまり、戦中には特別な国日本を強調し、戦争を鼓舞する言葉でありました。日本は「金甌無欠」ではありません。「金甌無欠」ではありえない。日本であれどの国であれ、「世界の中心で輝く国」ではありえないことから出発しなければ、日本は国際社会で安定した地位を得られないのではないのか。

しかし、この「世界の中心で輝く国」という言葉は、アメリカの政治家のいう a Shining City upon a Hill に影響を受けていることはないだろうか。「世界の中心で輝く国」は面白いことに、「金甌無欠」とともに、「丘の上の町」の連想を生むのです。ちなみに、青山学院のスクールモットーの聖句は、「地の塩」「世の光」です。イエス・キリストの山上の説教にあるこの言葉は、ジョン・ウィンスロップの説教で語られ、新大陸アメリカを象徴する言葉として受け入れられています。旧世界ヨーロッパに対して、マサチューセッツ湾植民地は、キリスト教的愛の町のモデルとなるというわけです。アーベラ号の船中でこの説教を聞いたのはわずかに 100 名ほど、ボストンに最初に入植した人々は総勢 1,000 名ほどで、広大な世界に消え入りそうな存在でした。そのとき誰も、彼らが「世の光」となることは想像できなかったことでしょう。イエスの周りに集まった人々もそうでした。誰も自分を「地の塩」とも「世の光」とも思えない人々に、イエスは「あなたがたは地の塩、あなたがたは世の光」と宣言された。

「丘の上の町」は、世界帝国の指導者が自国を語るにふさわしい言葉ではありません。しかし、現在の日本の教会にはふさわしい、ミッションを雄弁に語ることでできない日本のキリスト教大学にはふさわしい言葉です。事実、この百数十年の歴史を持つ日本の教会で、日

本のキリスト教大学で学んで育った人々の中には、「地の塩」「世の光」というべき人が確かに輩出している。私どもは、そうした先達の歩みにも励まされながら、前進していくことにいたしましょう。

（この講演は、国際基督教大学献学 60 周年記念事業の一環として、2015 年 11 月 5 日に大学図書館歴史資料室の主催によって、東ヶ崎ダイアログハウス国際会議室に於いて行われた。本号への掲載をお許しいただいた大学図書館歴史資料室に厚く感謝する。）

